

恵庭の女神

鈴木将史

昨年は、例年にも増し出張が重なり、よく本州を往復した。ただ、最近では飛行機に乗ること自体よりも、小樽から新千歳空港に行くことが苦痛になってきた。JRで75分程度かかるわけだが、これほどの大都市（札幌）の空港が、これほど離れている例は国内では他にない。博多駅から地下鉄二駅目で空港に到着する福岡が、暮らしやすい街トップに挙がるわけも了解されようというものである。これが冬になるとよく遅れたりするのだから、「冬こそジェイアール!」などと辰巳琢郎がコマーシャルで豪語していたJR北海道の凋落ぶりは、目を覆わんばかりである。そうした中、昨年は新千歳空港まで十回以上は行ったかと思うが、そのうちの一回で、私は恐らく空前絶後の忘れ得ぬ体験をしたのであった。

あれは三月はじめの出張だった。午後一番でいつもの通り小樽発の新千歳空港行き「快速エアポート」に乗り込んだ。この列車の車両には二種類あり、古い車両は座席が進行方向に向く「クロスシート」方式、新しい車両は山手線同様、窓を背に乘客がずらりと座る「ロングシート」方式となっている。長く乗る場合、多くの人は乗り物酔いがしにくいクロスシートを好むと思うが、私もその例に漏れず、特に車両の一番後ろの席は一席のみの座席になっているので、空いている時はそこに座る（ただ、この席は二両にひとつの割合でシルバーシートとなっている）。当日は幸い空いていたのでそこに席を占めたが、車内はそれほど混んではおらず、私の前の二席も右側に三十路過ぎあたりの女性が座るのみだった。さて、そうして電車は小樽を出発し、手稲、札幌を経て新千歳空港に向かったわけだが、恵庭に停車したところで中々発車をしない。どうしたのかと訝っているとやがて車内放送がかかり、「千歳駅構内で人身事故が発生したため、しばらくここで待機し、安全確認が済んだ後に発車する」という。いつ頃発車できるかは明言せず、「過去の例からは一時間から二時間の待機になります」などと平気で告げている。10分やそこの遅れはまああったが、いよいよ私も事故（恐らく自殺）のための本格的な遅延に巻き込まれたのである。

さあ、この報に車内は色めき立った。早速列車を捨て、駅表のタクシー乗り場に急ぐ者も多数いる。だが車内からも見えるタクシー乗り場には、長蛇の列を作る待ち客の前に一台のタクシーも見当たらない。あそこに並んでいては、いつタクシーに乗れるのか見当もつかないのである。車内放送は「最寄りの空港行きバス停まで徒歩で約30分です」などと相変わらず能天気なアナウンスを続けている。私は大学総務課に電話し、便の変更を打診したが、バック旅行であるためまな

らないという。途方にくれていると、前の女性がなにやら電話している。思わず聞き耳を立てると、どうやら千歳のタクシー会社に連絡し、恵庭駅前まで一台出してくれるように要請しているのである。しかし千歳からは遠すぎて、それは無理なようであった。おろおろする他の乗客をよそに、この女性はしきりと電話をかけていたが、そうこうしているうちに、またアナウンスが流れた。「とりあえず、次の駅まで列車を進めます」という。そうすれば、バス停までも徒歩 15 分になるというのだが、大して有難い話でもない。(因みに、恵庭の次の駅というのは、余り知られていませんが、「サッポロビール庭園」という駅なのです。)すると前の女性がまた電話をし出した。再びタクシー会社社に電話し、より千歳に近づいたので迎車を出せないか改めて談判している。そしてその中の一社がとうとうオーケーしたようなのである。彼女は電話後おもむろに立ち上がり、私の横を通り、後ろのドアから出ていこうとした。その時、何気なく窓を見た彼女とほんの一瞬目が合った。私は慌てて目をそらそうとした。だが彼女は突発的ともいえる様子で出し抜けに私にこう尋ねたのである。「一緒に行きます?」

私は完全に虚を突かれ、ほとんど条件反射的な間合いで「ええ」と答えた。言ってしまうから、これはどうなるのだろうと懸念したが、とにかく彼女について列車を降り、無人駅であるサッポロビール庭園駅前に出ると、既に一台のタクシーが止まっていた。注文した迎車である。他の客もタクシーの周りに群がっていたが、律儀な運転手は注文者の彼女の名を聞き初めてドアを開けた。

車中の話だと、彼女は仕事で千歳市内に用があるということだったが、私を空港まで送ってくれるという。彼女は運転手と快活に語り合い、自衛隊退役者だという運転手も、彼女を気に入ったようだった。新千歳空港までは 3800 円かかったが、当然私は全部出すつもりだったところ、彼女は会社に出させるからいらぬといい、受け取りはしなかった。こうして私はあの絶体絶命の列車遅延状況から脱し、搭乗予定の便に遅れることなくコストロスもなく、無事に新千歳空港を後にすることができたのだ。あの列車の乗客中、難局をここまでリカバリーできた者は我々だけではなかったかとさえ思えるほど、彼女のリスク管理術は鮮やかだった。ましてや当初、彼女が私を誘ったのは、タクシー代を折半するためであろうと高をくくったのだが、それも下種の勘繰りだった。ああいう人物が本当に有能・有徳な女性というのだろう。彼女とは名刺の交換もしなかったため、今となっては再会して礼を言う機会も永遠に失われたが、私にとっては本当に地獄に仏、否地獄に女神であった。そして奇しくも、運転手が彼女の名を確認する声を聞いた後、私はその意を益々強くしたのであった。

「ジンノさんですか?」

(小樽商科大学教授)